

## LA FONTAINE の自由間接話法

岡 野 輝 男

作家がその作品に於いて作中人物の言葉や考えを読者に伝える場合（言語活動一般について言えば、或る人の言葉や考えを他人に伝える場合）、それをそのままの形で引用して伝える直接話法と、作家が（伝達者が）それを自己の言葉に直して伝える間接話法との二つの伝え方がある。間接話法は又、被伝達部が伝達部に直接結びついている場合と、そうでない場合とに分けられ、後者は一般に自由間接話法とよばれる。これらの話法はそれぞれ統辞論上異なった構造を持ち、又異なった文体効果を持っている。本稿は主として統辞論の立場から自由間接話法の構造を検討し、それを通して La Fontaine がどの様に自由間接話法を用いているかを考察しようとするものである。作品は Fables, Contes et Nouvelles 及びそれらに準ずる韻文の作品を中心とした。なお以下単に間接話法という時は自由間接話法を含まず、被伝達部が伝達部に直接結びついているもののみを指すものとする。

○

自由間接話法は、被伝達部が伝達部と直接結びついていないか、或いは伝達部を全く欠く話法である。従ってこの観点から

- A. 伝達部が被伝達部の前にある場合
  - B. 伝達部がない場合
  - C. 伝達部が被伝達部内に挿入されているか又は後におかれている場合
- の三つの型に大別することができる。

## A. 伝達部が前にある場合

伝達部が前にありながら被伝達部がこれに直接従属せず、そこから遊離・独立するとき、その被伝達部は自由間接話法となる。この場合、伝達部は間接話法となっていることが多いので、先ず間接話法の型について簡単に調べておくことが必要である。間接話法は

a. 被伝達部が従節となって、言明又は思考を表わす動詞（以下言明動詞という。dire, croire, penser, répondre, alléguer etc.）又はそれに準ずるもの（être d'avis etc.）と接続詞 que, 接続詞句 de ce que, à ce que など、又は間接疑問を導く語（si, qui, ce que, où, quel など）とによって導かれるのが普通と考えられるが、必ずしも従節によるとは限らず、次の様な種々な型が考えられる。

b. 不定法節

Il accusait toujours les miroirs d'être faux,  
(F., I, 11, 3)<sup>(1)</sup>

Elle menaçait Jupiter

D'abandonner sa cour, d'aller vivre au désert,

De quitter toute dépendance,

Avec mainte autre extravagance.

(F., II, 8, 42-45)

c. 目的補語 + 属詞

Par ce parangon des présents

Il croyait sa fortune faite, (F., XII, 12, 99-100)

Il voit ce corps gisant, le croit privé de vie,

(F., V, 20, 24)

d. 名詞的表現

Celle-ci déclara sa flamme. (F., XII, 1, 48)

Le loup donc l'aborde humblement,

Entre en propos, et lui fait compliment

Sur son embonpoint qu'il admire.

(F., I, 5, 10-12)

e. その他

Jupiter y consent. (F., VI, 4, 15)

On en convient. (C., V, 7, 119)

Une vache était là, l'on l'appelle, elle vient;

(F., X, 1, 31)

これらの内、被伝達文の内容は a に於いては比較的原形に忠実であるのに対し、b から e へ進むに従って、内容が凝縮され、原形を留めないものとなっていくことは明らかであり、d や e の型まで間接話法とよぶべきか否かについてはやや問題がある。従節によるもの（或いはそれと不定法節によるもの）のみを間接話法とみなすこともできるが、間接話法をそれに限定する根拠は稀薄である。しかし間接話法の境界を明確に定めることは困難であり、従節によるものを典型的な間接話法と考えることはできよう。

ところで、この従節による間接話法で被伝達部が二個以上の節から成る場合は、それぞれの節に接続詞をくり返さなければならない。

Dès l'abord leur doyen, personne fort prudente,

**Opina** qu'il fallait, et plus tôt que plus tard,

Attacher un grelot au cou de Rodilard;

**Qu'**ainsi, quand il irait en guerre,

De sa marche avertis, ils s'enfuiraient sous terre;

**Qu'**il n'y savait que ce moyen.

(F., II, 2, 14-19)

しかし場合によっては、二つ目以後の従節に於いて、その主語と共に que が省略されることがある。

On **crut** que jusqu'au lendemain

Le maudit animal à la serre insolente

Nicherait là malgré le bruit,

Et sur le nez sacré voudrait passer la nuit.

(F., XII, 12, 56-59)

だが次の例に於いては幾分事情が異なる。

Malc **annonce** au vieillard censeur de sa jeunesse

**Qu'**il va de ses aïeux recueillir la richesse:

**Qu'**il tâche d'empêcher que des biens assez grands

Ne soient mal dispensés par d'avares parents;

**Qu'**il veut fonder un cloître, *et destine* le reste

A vivre sans éclat, toujours simple et modeste,

Donnant un saint exemple, et par ses soins pieux  
Peut-être plus utile au siècle qu'en ces lieux.

(*Poème de la captivité de Saint Malc*, 29-36)

et destine 以下は que に導かれた三つの従節と同様主節に従属するものであることは意味上明白であり、que のくり返しに倦きて、これを省略したものと考えられるが、しかし、これと同じ文の構造を持ちながら et destine に当る個所以後が主節と等位関係にあることもある筈である。場合によっては両義に解釈し得ることもあり得よう。

間接話法の従節に、更に従属接続詞によって導かれる従節が続く場合もこれと類似の現象が見られる。

La commune s'allait séparer du sénat.  
Les mécontents **disaient** qu'il avait tout l'empire,  
Le pouvoir, les trésors, l'honneur, la dignité;  
*Au lieu que tout le mal était de leur côté:*  
*Les tributs, les impôts, les fatigues de guerre.*

(*F.*, III, 2, 34-38)

この例では *Au lieu que* に始まる従節は間接話法の従節（被伝達部）に従属するものであることは意味上明らかである。それはこの場合作中人物（以下単に人物という）の言葉を伝えているものである。しかし場合によっては、これらの従属接続詞がそれによって導かれた従節を主節（伝達部）に従属させることもあり得る。その場合、それは作者の言葉となる。先の場合に於けるのと同様、両義に解釈し得ることもあり得よう。

Un homme n'ayant plus ni crédit, ni ressource,  
Et logeant le diable en sa bourse,  
C'est-à-dire : n'y logeant rien,  
**S'imagina** qu'il ferait bien  
De se pendre, et finir lui-même sa misère,  
*Puisque aussi bien sans lui la faim le viendrait faire,*  
Genre de mort qui ne duit pas  
A gens peu curieux de goûter le trépas

(F., IX, 16, 1-8)

この例では *Puisque* 以下は一応間接話法の被伝達部内にあり人物の考えを表わすものと考えられるが、しかし作者の説明と考えられないこともない。そして又、例えばこの様な従節の前に強い休止がある様な場合には、一応それは主節と関係する様に考えられるけれども、それにも拘わらず、それが人物の言葉である場合もあり得る。こうした場合、読者は先ずそれが作者の言葉であることを感じ、次いで *contexte* によって人物の言葉であることを理解することになり、形式と内容との間にややずれが生じることになる。内容的には人物の言葉でありながら、作者自身の言葉であるかの様な形式をとる——それは即ち自由間接話法に他ならない。

しかし上述の場合、従属接続詞の前に *point* がおかれている（その場合、従属接続詞は独立文を導く等位接続詞としての機能を持つことになる）にも拘わらず、*contexte* によってそれが人物の言葉であることが明らかな時には（但し *La Fontaine* にはこの様な実例は見られない）それを自由間接話法とよび得るけれども、その他の場合に自由間接話法とよび得るかどうかは疑問である。例えば、先にあげた例（F., III, 2, 34-38）では、従属接続詞 *au lieu que* の前に *point-virgule* という一見かなり強い休止がある様ではあるが、この場合は休止を示すよりもむしろ被伝達部内での内容の対立を示すために用いられているもので、事実上の休止はないと考えられ、一般に *point-virgule* だからといって必ずしも強い休止を示すとは言えないと思われるし、又こうした場合、これらの従属接続詞の導入が読者の言語意識に対して直ちにそれを主節（即ち間接話法の伝達部）と関係させる様に働きかけるものであるならば、それにも拘わらず、*contexte* からそれが従節（即ち間接話法の被伝達部）と関係するものであることが理解される場合には、そこに形式と内容とのずれが生じることになるけれども、必ずしも常にその様に働きかけるものとも思われなからである。ただこの様な形を間接話法と自由間接話法とのいわば橋渡しをなすものとするのはできるし、自由間接話法の初歩的な段階と言うこともできよう。<sup>(2)</sup>

こうして我々はA型の自由間接話法即ち間接話法に続き伝達部から遊離・独立することによって生じた自由間接話法に達することになる。それは上述

の場合の様に両義の解釈ができるというのではなく、形の上ではあくまで作者の言葉でありながら、内容の上で人物の言葉であることが明瞭に理解される場合である。この型の自由間接話法はその遊離の程度によって幾つかの段階に分けることができる。

1. 従節による間接話法に続き、*que* の省略によって生じたもの

Il **dit** donc **que** sur sa frontière

Des animaux entre eux ont guerre de tout temps:

*Le sang qui se transmet des pères aux enfants*

*En renouvelle la matière.*

(*F.*, IX, Sab., 122-125)

Il **crut que**, de s'enfuir ayant mille moyens,

Ils se pourraient enfin soustraire à l'esclavage;

**Qu'il** fallait joindre aux fers les nœuds du mariage.

*Leur amour lui serait un gage suffisant.*

*Les doux fruits dont l'hymen leur ferait un présent*

*Augmenteraient ses biens, l'auraient encor pour maître.*

(*Malc.*, 232-237)

これらの例の自由間接話法は、その前に *que* を補えば言明動詞に従属してそのまま間接話法となるわけだが、*que* が省略されることによって伝達部から遊離し（特に後の例では独立文となって伝達部からは完全に遊離している）従って形の上では作者自身の叙述となっているのだが、意味の上からはやはり言明動詞に従属し、人物の言葉がなお続いているのであることは明らかである。この型の自由間接話法は La Fontaine の作品には他に次の個所に見出される。(F., II, 8, 36) (F., VI, 20, 23-26) (F., VII, 16, 18-19) (F., VIII, 8, 19-22) (F., VIII, 14, 8-10) (F., VIII, 18, 17-21) (F., X, 1, 60-62) (C., V, 8, 116-126) (*Malc.*, 344)

これらの内でやや特殊な一例をあげておこう。

Le rieur alors d'un ton sage

**Dit qu'il** craignait qu'un sien ami,

Pour les grandes Indes parti,

N'eût depuis un an fait naufrage.  
*Il s'en informait donc à ce menu fretin ;*  
*Mais tous lui **répondaient** qu'ils n'étaient pas d'un âge*  
*A savoir au vrai son destin ;*  
*Les gros en sauraient davantage.*

(F., VIII, 8, 15-22)

Il s'en informait 以下が言明動詞 Dit から遊離して自由間接話法となっているのだが、その中に répondaient によって導かれる間接話法があり、更にそれに続いて Les gros 以下がそこから遊離して自由間接話法となっている。いわば二重の自由間接話法である。

2. 1. と同じ場合で、間接話法の部分と自由間接話法の部分とで時制の異なるもの

Ainsi dit, il vient à pas comptés,  
 Se **dit** écolier d'Hippocrate ;  
**Qu'il** connaît les vertus et les propriétés  
 De tous les simples de ces prés ;  
**Qu'il** sait guérir, sans qu'il se flatte,  
 Toutes sortes de maux. *Si dom coursier voulait*  
*Ne point celer sa maladie,*  
*Lui loup gratis le guérirait ;*  
*Car le voir en cette prairie*  
*Paître ainsi sans être lié*  
*Témoignait quelque mal, selon la médecine.*

(F., V, 8, 11-21)

言明動詞及び間接話法内の動詞は全て物語体現在形におかれているのに対し、自由間接話法の部分では、現在及び未来がそれぞれ半過去及び条件法現在に transposer されて用いられている。時制の変化によって主節からの遊離度は 1. の場合よりも大きくなっていると言えよう。この型は他に (F., VII, 9, 20-22) (C., IV, 2, 64-67) (*Les Filles de Minée*, 153-155) がある。

3. 従属による間接話法に続き car などの接続詞によって導かれるもの

car は等位接続詞であり、しかも et や mais などと異なり que と両立し得ない。従って間接話法に続いて car によって導かれる節が来る時は本来ならば主節（伝達部）と等位におかれている筈であるが、次例の様にそれがなお伝達部に意味上従属していることもある。

Le pot de fer proposa  
 Au pot de terre un voyage.  
 Celui-ci s'en excusa,  
**Disant qu'il** ferait que sage  
 De garder le coin du feu:  
*Car il lui fallait si peu,*  
*Si peu, que la moindre chose*  
*De son débris serait cause.*  
*Il n'en reviendrait morceau.*

(F., V, 2, 1-9)

この型の自由間接話法は他に次の一例があるだけである。

Les sages du couvent  
**Furent d'avis que** l'on se devait taire;  
*Car trop d'éclat eût pu nuire au troupeau.*

(C., IV, 7, 136-138)

4. 従節による間接話法に続き、意味上からも言明動詞に従属し得ないもの

Il était un berger, son chien, et son troupeau.  
 Quelqu'un lui **demanda ce qu'il** prétendait faire  
 D'un dogue de qui l'ordinaire  
 Etait un pain entier. *Il fallait bien et beau*  
*Donner cet animal au seigneur du village.*  
*Lui berger pour plus de ménage*  
*Aurait deux ou trois mâtimeaux,*  
*Qui lui dépensant moins veilleraient aux troupeaux*  
*Bien mieux que cette bête seule.*

(F., VIII, 18, 37-45).

この場合の自由間接話法はその前に (et) que を補ったとしても伝達部の動詞 *demanda* には接続し得ない。従ってこれまでの型よりも一層遊離度が大きいと言える。自由間接話法が疑問文や感歎文となっている場合も同様のことが言える。

De prime face elle crut qu'on riait;  
 Puis se fâcha; puis **jura** sur son âme  
**Que** mille fois plutôt on la tuerait.  
*Que dirait-on si le bruit en courait?*  
*Outre l'offense et péché trop énorme,*  
*Calfeuce et Dieu savaient que de tout temps*  
*Elle avait craint ces devoirs complaisants,*  
*Qu'elle endurait seulement pour la forme.*  
*Puis il viendrait quelque matin difforme*  
*L'incommoder, la mettre sur les dents!*

(C., III, 2, 186-195)

L'un trouvait les dedans, pour ne lui point mentir,  
 Indignes d'un tel personnage;  
 L'autre blâmait la face, et tous **étaient d'avis**  
**Que** les appartements en étaient trop petits.  
*Quelle maison pour lui! L'on y tournait à peine.*

(F., IV, 17, 3-7)

この型は他に (C., II; 7, 260-263) (C., V, 7, 223-226) があるが、この後の例では自由間接話法の後 *que* によって導かれた従節による間接話法が再び続くという他に見られない形になっている。

A Mathéo (c'était le nom du sire),  
 Sans tant tourner, il **dit ce qu'il** était:  
**Qu'**un double mal chez lui le tourmentait,  
 Ses créanciers, et sa femme encor pire;  
**Qu'**il n'y savait remède que d'entrer

Au corps des gens, et de s'y remparer,  
 D'y tenir bon: *irait-on là le prendre?*  
*Dame Honesta viendrait-elle y prôner*  
*Qu'elle a regret de se bien gouverner?*  
*Chose ennuyeuse, et qu'il est las d'entendre.*  
**Que** de ces corps trois fois il sortirait,  
 Sitôt que lui Mathéo l'en prierait:  
 Trois fois sans plus, et ce, pour récompense  
 De l'avoir mis à couvert des sergents.

(C., V, 7, 217-230)

なお次の例で、

Puis il **demande** aux gens **comme** on les nomme,  
**Ce qu'ils font là, d'où** vient que dans ce lieu  
 L'on le retient; et *qu'a-t-il fait à Dieu?*

(C., IV, 6, 122-124)

comme, ce que, d'où によって導かれた間接話法に続いて自由間接話法が現われるのだが、この場合は今までの例と異なり、ce qu'il a fait à Dieu という形で言明動詞に接続できることになるので別の型に分類すべきであると考えられるが、この様なものも他には例がない。

##### 5. 従節によらない間接話法に続くもの

これまでは従節による間接話法に続く自由間接話法について見てきたのだが、先に述べた様に間接話法は従節によるとは限らない。自由間接話法が従節以外の構造による間接話法に続くとき、その伝達部からの遊離度は今までの場合より一層大きくなることは言うまでもない。伝達部はそれ自身間接話法として凝縮され、要約された形で人物の言葉を伝え、それによって更に次の自由間接話法への導入の役目を果たしているのである。次に述べるA6の型と共にA型の自由間接話法の内、最も進んだ段階のものといえることができる。

Le singe approuva fort cette sévérité,  
 Et, flatteur excessif, il **loua** la colère

Et la griffe du prince, et l'antre, et cette odeur:

*Il n'était ambre, il n'était fleur,*

*Qui ne fût ail au prix.* Sa sottise flatterie

Eut un mauvais succès, et fut encore punie.

(F., VII, 7, 20-25)

Le mulet d'un prélat se piquait de noblesse,

Et ne parlait incessamment

Que de sa mère la jument,

Dont il **contait** mainte prouesse.

*Elle avait fait ceci, puis avait été là.*

Son fils prétendait, pour cela,

Qu'on le dût mettre dans l'histoire.

(F., VI, 7, 1-7)

Le mari passe quelques jours

A **raisonner** sur cette affaire:

*Un cocu se pouvait-il faire*

*Par la volonté seule, et sans venir au point?*

*L'était-il? ne l'était-il point?*

Cette difficulté fut encore éclaircie

Par Nerie.

(C., III, 4, 339-345)

最後の例は自由間接話法が疑問文になっている例である。

以上の型に属する例は La Fontaine の用いている自由間接話法の中で最も多く、これを La Fontaine の自由間接話法の典型的なものと言ってよい。以上にあげた例の他、次の個所がそれに当る。(F., I, 8, 24) (F., I, 6, 7-9) (F., IV, 11, 16-19) (F., V, 7, 12) (F., VI, 16, 8) (F., VII, 1, 60-62) (F., VII, 3, 15-23) (F., VII, 7, 31-32) (F., VII, 18, 46-49) (F., VIII, 20, 48) (F., IX, 13, 28) (F., X, 7, 7) (F., XII, 14, 24-26) (F., XII, 16, 9-11) (F., XII, 20, 14-15) (C., II, 14, 344-345) (C., III, 2, 62-63) (C., III, 2, 149-154) (C., III, 4, 261) (C., III, 4, 279-287) (C., III,

13, 82-84) (C., IV, 6, 85) (C., IV, 6, 149-159) (C., IV, 8, 220-227)  
 (C., IV, 14, 22-23) (C., V, 3, 47) (*Philemon et Baucis*, 110-111)

#### 6. 擬似伝達部に続くもの

前の文に言明動詞がなく、従って間接話法もないけれども、それに代る語  
 (動詞とは限らない) が自由間接話法を導くことがある。

Pleine de honte et d'amour tout ensemble,

Elle se met aussitôt à **pleurer**:

«A son amant peut-elle se montrer

*Après cela?* qu'en pourra-t-il penser?

Dit-elle en soi; et qu'est-ce qu'il lui semble,

J'ai bien manqué de courage et d'esprit. »

(C., III, 2, 271-276)

pleurer は言明動詞とは言えず、又上例で間接話法を導いているとも言えないが、それに準じたものとみなし得る<sup>(3)</sup>。この様な伝達部を擬似伝達部とよぶことができよう。次例の rit についても同様である。

Leur fils se plaint d'étrange sorte;

Il éclate en cris superflus:

Le père en **rit**; sa femme est morte.

(F., XII, 19, 6-8)

次例の様に通常の言明動詞から更に遠いものも擬似伝達部とみなし得る。

L'arbre étant prit pour juge,

**Ce fut bien pis encore.** *Il servait de refuge*

*Contre le chaud, la pluie, et la fureur des vents;*

*Pour nous seuls il ornait les jardins et les champs.*

(F., X, 1, 67-70)

この様な擬似伝達部は、読者を人物の意識・心理へと導き、それによって自然に次の自由間接話法を導入する役目をもつものである。但し先にも述べた様に、間接話法の境界（及至言明動詞の境界）は必ずしも明確ではなく、従ってこの型と A 5 の型との境界も必ずしも明確ではない。この型に属するものと考えられる例は以上の他に (F., IV, 1, 32-38) (C., IV, 3, 107) があ

る。

なお、以上に見て来た例から明らかな様に、自由間接話法は必ずしも一つの節（又は文）だけでなく数個の節（又は文）から成立つこともできる。一度導入されれば、少なくとも理論的には如何に多くの文をも自由間接話法におくことができる。このことはどの型の自由間接話法についても同様である。

#### B. 伝達部がない場合

伝達部を全く欠いて、しかもそれが作者の叙述ではなく、人物の言葉・考えであることを理解させるためには、何らかの指示がなければならぬ。従ってこの型の自由間接話法はその指示の種類によって分類することができる。

##### 1. 指示語（名詞・動詞その他）が後に来るもの

Ce ne fut pas sans résister

Qu'au choix qu'on fit de lui consentit le bon homme.

*L'affaire était longue à traiter;*

*Il devait demeurer dans Rome*

*Six mois, et plus encor; que savait-il combien?*

*Tant d'honneur pouvait nuire au conjugal lien:*

*Longue ambassade et long voyage*

*Aboutissent à cocuage.*

**Dans cette crainte**, notre époux

Fit cette harangue à la belle:

(C., III, 13, 36-45)

dans cette crainte によって、その前の部分が作者自身の叙述説明ではなく人物の考えを表わす自由間接話法であることが理解される。この他に (F., I, 21, 10-11) (F., IV, 11, 21) (C., III, 1, 115-122) (C., III, 5, 141-155) がある。勿論この様な指示語がA型の自由間接話法に於いて見出されることもある。一例だけあげておこう。

Le galant **s'accorde** à cela:

*Commander, était-ce un mystère?*

*Obéir est bien autre affaire.*

**Sur ce penser-là** notre amant

S'en va trouver sa belle, en a contentement,

(C., IV, 14, 21-25)

2. 時制の transposition によるもの

自由間接話法では多くの場合間接話法と同様に、時制のいわゆる transposition が行なわれる。次例での半過去・条件法現在がそれぞれ transposer された現在・未来であることは直ちに理解される。

A frais communs se conduisait l'affaire:

*Ils ne devaient nulle chose se taire.*

*Le premier d'eux qu'on favoriserait*

*De son bonheur part à l'autre ferait.*

(C., III, 3, 44-47)

[Ils se disaient qu'] Ils ne devaient... [et que] Le premier d'eux... と解釈しなければならないことは明瞭である。この他に (F., IX, 19, 17) (C., V, 8, 92-96) (C., V, 8, 108-112) がある。

3. contexte のみによるもの

他に何ら指示はなく唯, contexte のみによって明白にそれが人物の言葉であることが理解されることもある。

Rien ne la contentait, rien n'était comme il faut:

*On se levait trop tard, on se couchait trop tôt;*

Puis du blanc, puis du noir, puis encore autre chose.

(F., VII, 2, 15-17)

Tout le jour il avait l'œil au guet. Et la nuit,

Si quelque chat faisait du bruit,

*Le chat prenait l'argent.* (F., VIII, 2, 44-46)

Elle disait qu'on se levait..., Il pensait que le chat... の意であることは明らだが、しかし言語手段としては、それが人物の言葉・思考であることを示す何らの指示も導入もない。それが作者自身の言葉でないことを知るの  
は唯, contexte のみによる。(F., VII, 5, 44-51) (F., XI, 8, 4) (C., III, 13, 254-255) (C., IV, 6, 120-121) も同様である。この中の最初の例では

自由間接話法は直接話法に続いて現われる。

La belle les trouva trop chétifs de moitié.

«Quoi! moi? quoi! ces gens-là? L'on radote, je pense.

A moi les proposer! Hélas! ils font pitié.

Voyez un peu la belle espèce!»

*L'un n'avait en l'esprit nulle délicatese;*

*L'autre avait le nez fait de cette façon-là;*

*C'était ceci, c'était cela,*

*C'était tout: car les précieuses*

*Font dessus tout les dédaigneuses.*

(F., VII, 5, 44-52)

形の上では人物の言葉は直接話法と共に終り、従って読者は作者自身の言葉を期待するのだが、やはり *contexte* によって人物の言葉がなお続いていることを知るのである。又、独立文に限らず、関係節や状況節のみが自由間接話法であることもある。

Une lieue étant faite,

Eux discourant, pour tromper le chemin,

De chose et d'autre, ils tombèrent enfin

Sur ce qu'on dit de la vertu secrète

De certains mots, caractères, brevets,

*Dont les aucuns ont de très bons effets:*

*Comme de faire aux insectes la guerre,*

*Charmer les loups, conjurer le tonnerre,*

*Ainsi du reste; où, sans pact ni demi*

*(De quoi l'on soit pour le moins averti),*

*L'on se guérit; l'on guérit sa monture,*

*Soit du farcin, soit de la mémarchure;*

*L'on fait souvent ce qu'un bon médecin*

*Ne saurait faire avec tout son latin.*

(C., II, 5, 33-46)

dont 以下の関係節は、それが人物の言葉であることを示す指示はないけれども、作者自身の言葉でなく、人物の言葉であることは明らかである。

だが以上の様に *contexte* 以外に指示が全くないときには当然作者の言葉か人物の言葉かあいまいな場合も生じることになる。Lips はこうした場合の例をいくつかあげているが、その中から一例を借りれば、<sup>(4)</sup>

Tous ensemble au sanglier voudraient lancer leurs dards,

*Mais peut-être Adonis en recevrait l'atteinte.*

(*Adonis*, 502-503)

これは作者の説明であるのか、Adonis の友人達の考えを伝えているのか明らかでない。この様なあいまいさは作者の人物に対する主観的な態度に由来するものと言えよう。その場合、作者は人物と一体化し、人物の心理を自己のそれによって説明し、人物の思考を自己の思考と同一視してしまうわけである。従って人物の言葉か作者の言葉かあいまいであるということは、実はそれが同じものだけということである。

notre homme un beau matin

Va chercher compagnie, et se met en campagne.

L'ours porté d'un même dessein

Venait de quitter sa montagne.

Tous deux par un cas surprenant

Se rencontrent en un tournant.

L'homme eut peur: mais comment esquiver? et que faire?

*Se tirer en Gascon d'une semblable affaire*

*Est le mieux.* Il sut donc dissimuler sa peur.

(*F.*, VIII, 10, 21-29)

この例では問題の個所は前後の過去形に対して現在形におかれ、しかもそれは物語体現在形ではなく一般的真理を表わす超時的現在を示すものと考えられるので、La Fontaine がよく行なう様に事件を前にして自己の感想を述べたものとも思われるが、後続く *donc* によって人物もやはり作者の考えと同じことを考えていたことが明らかになる。次例の様にたとえ *donc* の様な前の文を受ける言葉がなくとも同じことが言える。

En sage et discrète personne,

Maître chat excusait ces jeux:

*Entre amis il ne faut jamais qu'on s'abandonne*

*Aux traits d'un courroux sérieux.*

Comme ils se connaissaient tous deux dès leur bas âge,

Une longue habitude en paix les maintenait;

(F., XII 2, 12-17)

この様に人物の言葉か作者の言葉かあいまいな場合、というよりも人物の言葉でもあり、作者の言葉でもある様な個所は La Fontaine の作品にはかなり多く見出される。 Lips の言う通り、ここに自由間接話法の一つの起源を見出すことはできるし、これを自由間接話法のいわば前段階とよぶことはできよう。しかしこれを今迄に見てきた自由間接話法と同様に取扱うことはできない。自由間接話法であるためには、それが形の上では作者の言葉でありながら、実は人物の言葉であることが明瞭に理解されることが必要である。

なおここで自由間接話法とも直接話法ともとれる場合があることを注意しておこう。これは特に活用形の動詞を含まない時におこり易い。

Quand vint à la chemise,

La pauvre épouse eut en quelque façon

De la pudeur: *Etre nue ainsi mise*

*Aux yeux des gens!* Magdeleine aimait mieux

Demeurer femme, et jurait ses grands dieux

De ne souffrir une telle vergogne.

(C., IV, 10, 113-118)

この他 (F., VII, 2, 19) (F., IX, Sab., 126-135) (C., III, 13, 256) (C., IV, 12, 39) (*Minée*, 536-541) も同様である。この場合も自由間接話法とよぶべきか否かは問題であり、一応区別することが必要であろう。

#### C. 伝達部が挿入されている場合

La lice lui demande encore une quinzaine.

*Ses petits ne marchaient, disait-elle, qu'à peine.*

Pour faire court, elle l'obtient.

(F., II, 7, 6-8)

この型と間接話法 Elle disait que ses petits ne marchaient qu'à peine. との関係は、直接話法 Elle disait: «Mes petits ne marchent qu'à peine. » と、同じく «Mes petits, disait-elle, ne marchent qu'à peine. » との関係に並行するものである。ここでは伝達部は間接話法に於ける様に被伝達部を導入はせず、挿入節としてむしろ被伝達部に対して従属的な位置にある。挿入節は文尾に来ることもできる。上例では前に demande... という伝達部があるので disait-elle がなくとも自由間接話法であることは読者に明瞭に理解される筈であり、A型とC型との混合型と言えるが（但しこの様な型は La Fontaine には他にない）、次例ではこの様な伝達部はない。

Pour se rendre Philis un peu plus favorable,

*Le Gascon eût couché, dit-il, avec le diable.*

(C., II, 13, 64-65)

この型の挿入節は Verschoor<sup>(6)</sup> の言う通り parenthèses としての価値をしか持っていない。従って伝達部が dit-il の形ではなく、次例の様な形のものである場合も同じ型の自由間接話法と考えることができる。

Le pédant, de sa grâce,

Accrut le mal en amenant

Cette jeunesse mal instruite:

*Le tout, à ce qu'il dit, pour faire un châtiment*

*Qui pût servir d'exemple, et dont toute sa suite*

*Se souvint à jamais comme d'une leçon.*

(F., IX, 5, 21-26)

Si l'on eût cru leur murmure,

Elles auraient par leurs cris

Soulevé grands et petits

Contre l'œil de la nature.

*Le Soleil, à leur dire, allait tout consumer,*

*Il fallait promptement s'armer,*

*Et lever des troupes puissantes.*

(*Le soleil et les grenouilles*, 15-21)

自由間接話法は独立節に限らず従節に現われることもあり得ることは既に述べたが、この型に於いても同様である。<sup>(7)</sup>

Il fut tout étonné d'ouïr cette cohorte  
 Le proclamer monarque au lieu de son roi mort.  
 Il ne se fit prier que de la bonne sorte,  
*Encor que le fardeau fût, dit-il, un peu fort.*  
 Sixte en disait autant quand on le fit saint-père.

(*F.*, X, 13, 44-48)

更に挿入節が状況補語にのみ関係することもある。

La belle s'y rend la première,  
 Sous le prétexte d'*aller faire*  
*Un bouquet, dit-elle* à ses gens.

(*C.*, III, 7, 146-148)

始めにあげた (*F.*, II, 7) の様に前にも伝達部 (乃至それに準ずるもの) がある場合を別にすれば、この型をも B 型に含めて考えることもできる。その場合挿入節 (句) が人物の言葉であることを示す指示となる。しかしこの指示は B 型の場合の指示が、むしろ暗示・示唆といった段階にとどまっているのに対して、いわば余りにも強過ぎる指示である。特に *dit-il* の型の挿入節の場合は、B 型に比べて形の上ですぐと間接話法に近い。従ってこれは間接話法と B 型の自由間接話法との中間に位置するものといえることができる。この型には他に (*F.*, II, 3, 6-7) (*F.*, IV, 11, 29) (*F.*, V, 20, 4-8) (*F.*, VIII, 1, 34-37) がある。

なお次の例の様に

Alaciel, à **ce qu'on dit**,  
 N'en demandait pas davantage.

(*C.*, II, 14, 779-780)

Quelques rates, **dit-on**, répandirent des larmes.

(*La ligue des rats*, 30)

dit-on や à ce qu'on dit などが挿入されている場合、一般に特定の作中人物の言葉を伝えているものではないから話法とはよび難い。但し次の例などはこの型の自由間接話法と見なし得よう。

Elle, prudente et sage,  
 Consulte son voisin: c'était un maître rat  
 Dont la rateuse seigneurie  
 S'était logée en bonne hôtellerie,  
 Et qui cent fois s'était vanté, **dit-on**,  
 De ne craindre de chat ou chatte  
 Ni coup de dent, ni coup de patte.

(La ligue des rats, 3-9)



以上、我々は自由間接話法をいくつかの型に分類することによって、La Fontaine のそれがどの様なものであるかを見てきた。既に述べた様に La Fontaine に最も多いのはA 5の型であるが、それは十分な導入によって読者を自然に人物の心理・感情の内部へと誘い込んで行く自由間接話法の特徴が最もよく発揮されている型と言える。この型の使用が多いということは La Fontaine が如何にこの話法の用法に優れていたかを示すものと言えよう。

Flaubert 以前に於いて特に巧みな自由間接話法の使用が見られるのは La Fontaine であることは既に多くの学者が指摘していることではあるが、自由間接話法は既に古代フランス語に於いてその使用が見られるのであって、Bruneau が「La Fontaine に至るまでフランス語は直接話法と間接話法としか知らなかった<sup>(9)</sup>」と言っているのは誤まりと言わざるを得ない。しかし La Fontaine 以前の自由間接話法については必ずしも十分な調査がなされているとは未だ言えないようであり、従って性急な結論を出すことは避けなければならないが、Lips や Verschoor のこの話法に関する歴史的概観<sup>(10)</sup>による限り、16世紀以前には近代的な自由間接話法はほとんど見られないと言ってよい様である。中世には自由間接話法の近代的用法は見られないという Lips の意見<sup>(11)</sup>に対して、Verschoor は多くの例をあげて中世にも近代と異なる<sup>(12)</sup>用法が見られると言っているけれども、その例の多くは我々の分類によるA

1, A 3 の型で, B 型のものも多くは *car* や *parce que* に始まる節のものに限られ, La Fontaine に於いて多くの例を見てきた A 4, A 5, B に類似する用例はほとんど見られない。16 世紀には特に間接話法に続く *que* の省略によって生じた自由間接話法がかなり見られる様だが, Lips のあげている Rabelais の例, Verschoor のあげている *Heptaméron* の例など, 何れもほとんど A 1 及び A 3 の型に限られている。文の論理的構造を重んじた 17 世紀に, 更に自由間接話法の使用が稀であることについては両者の意見は一致して居り, 従って少なくとも現在の研究段階に於ける限り, 17 世紀以前に於ける La Fontaine の自由間接話法の使用は他に類例を見ないものと言えるであろう。何故この様な特殊性が La Fontaine に於いて可能であったのかは興味ある問題であるが, これについての考察は文体論の立場からのこの話法の研究と共に今後の機会にゆずりたいと思う。

## 註

- (1) *F.* は *Fables*, *C* は *Contes et Nouvelles* の略。例えば (*F.*, I, 11, 3) は「寓話第一卷第十一話第三行」を示す。使用テキストは Pléiade 版。番号も同版による。但し随時 Grands Ecrivains 版を参照した。
- (2) J. A. Verschoor: *Etude de grammaire historique et de style sur le style direct et les styles indirects en français*. Groningen, Druk, 1959. はこの様なものをも自由間接話法としているが, この扱い方にはやゝ疑問がある。
- (3) なおこの例で, A son amant の前に guillemets があるが, 代名詞 son, elle によってこれが直接話法ではなく自由間接話法であることは明瞭である。Qu'en pourra-t-il 以下が直接話法となる。なお註(7)参照。
- (4) M. Lips: *Le style indirect libre*. Paris, Payot, 1926, pp. 140~142.
- (5) *ibid.*, pp. 101~111.
- (6) Verschoor: *op. cit.*, pp. 3~4, p. 36. なお cf. Le Bidois: *Syntaxe du français moderne*. Paris, Picard, 1935~38, § 1120.
- (7) この様に文の一部のみが人物の言葉の伝達である場合, 或いはそれに限らず一般に自由間接話法の個所に於いて, guillemets をおくことが特に近代の作家によく見られる。しかし 17 世紀には guillemets の使用は未だ確定せず, La Fontaine の自由間接話法の個所も版によって guillemets の有無が異なるので, 本稿では guillemets に関しては一切論じなかった。
- (8) 特に Lips: *op. cit.*, pp. 137~148. 及び Le Bidois: *op. cit.*, § 1324.

- 1) Brunot et Bruneau: *Précis de grammaire historique de la langue française*. Paris, Masson, 4<sup>e</sup> éd., 1956, p.376.
- 2) Lips : *op. cit.*, pp.117~196. は17世紀以後についてかなり詳細に調べているが, 16世紀以前については比較的簡単にしか取扱っていない。これに対し, Verschoor : *op. cit.*, pp.63~144. は特に12世紀後半から13世紀末までの古代フランス語に関して詳しい。
- 1) Lips : *op. cit.*, p.125.
- 2) Verschoor : *op. cit.*, p.98, p.156.